

PRO-LIFE

胎児を守る運動

2000年11月 No.121

中絶に反対する運動

人のいのちの神聖さ

人間はさまざまな特権をもち、絶対的にも抽象的にも考えることができ、幸せも悲しみも感じられ、善と悪の違いも学び、神を知るも拒絶するも、どちらを選ぶことも許される。つまり、神の姿を型どって造られた唯一の創造物である我々は、神の姿を反映して生きる知的潜在能力をもつ。(創世の書 一：26、27、コリント人への第一の手紙 十一：7、ヤコブの手紙 三：9)

もしも神の威厳を見失ったなら、当然、人間の中にある威厳をも見落とし、最終的には神が我々に望むものに反する行動に出てしまう。我々は神ではないし、神の特質の一部を受け継ぐのみである。人として誠実に行動する時、我々は神の姿を反映している。つまり、神の目線で物を見て、キリストのように生きる。どんな人間の尊厳をも傷つけず、神の意志を模索し、その跡をたどりながら、他者を大切に継続する努力が必要である。

「人間至上主義」で過ちや弱さを正当化してしまうと、本当に人

間らしくあると願う心も失われていく。向上心を欠き、AさんよりBさんに価値があるという相対的価値観に基づいて判断を善しとする。不完全な世界ゆえ人生につきもの苦勞の結果、人間の価値に優劣をつけるようになってはならない。すべてのいのちに無限の価値があるのだから。健康な精神・身体・心情をもつ我々は、自分の体力や能力や知恵を創造的な発展のために提供し、同じ人間同士でも幸少ないと思われる人達に分け与えていこう。

善か悪かの判断が、いつも容易とは限らない。だが、人間はみな神の創造物で無限の価値を持つという視点に立てば、おのずと方針が見えてきて、自分の信念に基づく判断における迷いや、限りある人間の理性の荒野で自分を見失うのを防げる。

どう生きるか、どう死ぬかは、神の視点で考えるべきなのに生命倫理関連の出版物は、何かと生命やその限界に焦点をあてたがる。我々が自分を、そして他人の身体をどう扱うかは、神が人間をどう

扱うことを望んでいるかに照準を合わせるべきである。結局、我々が他人にどう接するかは、我々が神にどう接するかの方針と表裏一体である。

『自分自身の』子ども欲しさに体外受精で卵子や精子の提供を受ける、人生の始まりと終わりの操作、苦痛をコントロールする目的と方法、代替薬の使用の是非、これらのテーマに対する答の方針はもう明らかだろう。こうした諸問題に、人のいのちの尊厳や無限の価値の認識を抜きに正しく答えることは不可能である。

ゲリ・ペンネテフト

ローマ教皇 生殖技術を非難

ローマ教皇

教皇ヨハネパウロ二世は、人間の胎児を必然的に消滅させる人工生殖技術を厳しく非難した。

さる4月3日、国際会議である『患者としての胎児』に参加していた三千五百名の聴衆を前に聖なる父は、「人工生殖技術の中には、表

面上は人命の救助と見せかけながらも、実際にはいのちに新たな攻撃をしかける第一歩にすぎないものもある。」と訴えた。教皇が演説を行った会議は、ローマのサピエンザ大学付属の産科研究所が主催したものである。

ローマ教皇はさらに、人工生殖技術は、『夫婦間の行為という極めて人間的な面と出産を切り離し』、これから生まれて来る子どもものいのちの破壊をもたらすことになる場合は『道徳上受け入れられない』と述べた。

生殖にかかわる技術の中でも特に容認できないのは、多数着床していた場合の『減数手術』。つまり、複数の胎児を妊娠していた場合、一人あるいはそれ以上の胎児を中絶することであると教皇は続けた。さらに彼は、こうした中絶は自然に複数の胎児を妊娠して中絶する場合でも重大な過ちであるが、排卵誘発剤などにより多数児妊娠が故意に行われた結果である場合、さらに憎むべき行為であると述べた。

しかし、いかなる方法で妊娠したにしろ、生まれて来る子どもものいのちは十分に尊重されるべきであると教皇は断言した。どのような方式で受胎したにせよ、生まれて来る子どもには『受胎した瞬間から持ち合わせる威厳』が与えられるべきである。

予備の臓器のための人間のクローン化

これから十年後には、脳卒中やパーキンソン病や他の今は不治の病気の犠牲者にも、やっと治療の希望が持てるようになるかもしれません。二つのアメリカの会社が、損傷を受けた脳細胞を若返らせることができるかもしれない技術を開発中です。

しかし、一つだけちょっとした倫理的問題があります。それはクローン化とそれに伴って、可能性のある人間のいのちを消してしまうという問題です。

病気によって損傷を受けた脳を若返らせるために、医者は損傷を受けていない細胞、それも年老いた細胞ではなく、できるかぎり患者自身の細胞と同様なものが重要です。クローン化という新しい技術が、それに対する答えを与えてくれました。医者は女性から卵子を、男性から精子を採取し、研究室の中で人間の胚をつくるのです。それから、成長して人間になるであろう人の設計図である胚自身のDNAを取りのぞき、それを患者の血液や口からこすり取ったものから取り出したDNAに置き換えます。その操作は、一人の人間となる可能性のある胚を、別の人間となる可能性のあるものに

変えることになりす。それはその胚を、患者自身のクローンにすることになるのです。その胚は、五、六日、あるいは必要とされる細胞に成長する期間、成長します。それからその細胞が取り除かれ、移植されるのです。胚は、破壊されてしまうことになるのです。

それとはまた別に、法律上の詮索をされる原因となるかもしれないませんが、患者のDNAを人間の受精卵に入れる代わりに、患者のDNAを牛の受精卵に入れ、一時的な人間と牛の雑種をつくることのできるでしょう。牛の卵子を用いる技術は、人間の受精卵を用いる技術と同様にうまくいき、そしてより安価にすむでしょう。

牛の卵子を利用して、マサチューセッツ州ウースターのアドバンスト・セル・セラピューティクス社のマイケル・ウエスト社長は、自分の会社がしていることをみんなが非倫理的なことだと思ふことに当惑していると言っています。六月十四日のワシントンポスト紙に載せられたインタビューにおいて、彼は次のように説明しています。「人々は、私たちがまだ何物にも

なっていない細胞のことについて話していることに気づ

いていないと思います。その細胞には手も足もないのです。そしてこの議論の多くは、「胚」というような言葉が呈する心理的イメージに関するものなのです。人間の病気を治療するために科学がこの細胞を利用することを妨げるなら、それははなはだしい退歩になるでしょう。」

ウエスト氏は、この牛と人間の雑種を出産させる意図は全くないことを明確にしています。彼はアメリカの法律によって、胚が医療目的に使われる「治療法としてのクローニング」と、胚が発達して赤ん坊になる「繁殖目的のクローニング」が区別されることを望んでいます。

ウエスト氏の思いにもかわからず、もし彼または、彼のライバル企業である、人間の卵子を用いる草分けのカリフォルニア州、メンロパークのジェロン社が、クローニング技術を成功させることができるならば、最初のクローン人間が誕生するのは時間の問題、それもさほどかからないうででしょう。人間のクローン化が進行中であると思う人は誰でも、ポスト紙の第一面を少し読んでみて下さい。

「胚研究は、人間を作物のように収穫するという恐怖を生み出す」という見出しのほば真下に、ポスト紙が「ゲイビーブーム」と呼んでいるもの、つまり「代理授精または代理母」によって作られた子どもを育てる同性愛者の夫婦が劇的に増加していることに関するレポートがあります。どちらの方法ももちろん法律上の問題があります。代理母は、ニュージャージー州や他の州では違法であり、精子を提供した人が数年後に再び姿を現し、訪問の要求をすることがあります。クローニングは、それが、ますます増加している異性愛の「シングルマザー」になる選択をした人々の赤ん坊を切望する気持ちに對する完璧な解決方法であるのと同様に、父親母親なしに赤ん坊を作るといふ問題に對する完璧な解決方法なのです。生殖目的のクローニングを行なう病院や医師には何十万ドルもお金が必要で、残念ながら人間のナルシズムを過小評価しているのです。

しかし、ウエスト氏が言うことが正しく、彼の技術が何と「治療目的」のための使用に制限されることのできるならば、限定しなう。10年かそこらたてば、何万もの人間または牛の胚が研究室の中で授精され、生きた人間のクローンに変えられ、それらの親とでも呼ばばいいのでしょうか、とにかくその人がその細胞を利用できるように、切り分けられことになるでしょう。

現在、アドバンスト・セル・セラピューティクス社とジェロン社の研究に對する法律上の歯止めは全くありません。アメリカ合衆国大統領は、連邦の資金援助を受けている科学者が人間の胚に関する実験をすることを禁止する行政命令を一九九四年に出しましたが、合衆国議会は、民間の科学者に對して同様の禁止措置を取ることを繰り返し拒否してきました。

禁止に反対のロビー活動は、「治療目的」のクローニングはヨーロッパでは完全に合法的であることを指摘している。パイオテクノロジー産業と、「手も足もない」ものが、人間に与えられている尊敬と保護を受ける資格が最終的に与えられるかもしれないことを認めるといふことが意味するものを恐れている中絶権賛成運動と一緒に、たつた強力なものとなつています。科学的進歩と生殖の選択の名において私たちは、人間となる可能性のあるものから部品取りをするところが正常な医学的行為となるであろう世界の方へ進んでいるのです。私たちは本当にその方向に進むことを望んでいるのでしょうか。

『コンドームはAIDSの広まりを止めない』

「コンドームはAIDSウイルスの感染を防ぐための安全な手段である」とコンドームを宣伝している広告は、誤解を与えているものであり、無責任なものです。このようなコンドームの広告では、AIDSウイルス感染の具体的な予防率については意図的に触れられていません。勿論これには理由があります。避妊具であるコンドームは、AIDSウイルス伝染の予防に対してもそれ以上の効果を示さないのです。そして、この事実、コンドームを使つてのセックスは、禁欲でいることと同じレベルではなく、AIDSの予防には役立たないということを示しています。

避妊の専門家は、コンドームの「失敗率」は3%であると言っています。すなわち、コンドームを100%正しく使用することを前提にした場合に、100人の女性の内、一年間で三人に予期せぬ妊娠が起こるといふことを示しています。しかしながら、普通にコンドームを使用した場合には、「制限組」これ

以上子どもを造る意志が全く無いカップル」では予期せぬ妊娠の確率は10%で、「間置き組」(まだ子どもを増やそうという意志のあるカップル)ではその確率は20%であると言われております。病気の予防のためにコンドームを使用する人達が、妊娠の予防のために使用する人達よりも良い結果を得るとは考えにくいので、「制限組」の10%という確率が最も妥当な数字であると思われまふ。

まず第一に念頭に置いておかななくてはならないのが、10%の予期せぬ妊娠とは、一周期の25%しか女性に妊娠可能でないことを前提にしているということなのです。つまり、平均的な28日周期で考えた場合、最高7日間しか妊娠可能ではないということなのです。しかしながら、AIDSウイルスは毎日でも感染する可能性があります。よって、ウイルスに感染する可能性は少なくとも4倍になるということなのです。

したがって、10%の伝染率は40%まで引き上げなくてはなりません。しかもこの40という数字は一年当たりの数字です。すなわち、二年半の間、普通にコンドームを使用した場合、100人のAIDSウイルスキャリアアから、他の100人にAIDSウイルスが感染することが当然予想できます。

これらの数字は実際のコンドームの使用にともなう妊娠率に基づいているため、本当はもう少し高い値になる可能性がおります。10%の妊娠率とは、ある期間中の10%の時間しか精子が到達していないということを示しているわけではありませぬ。様々な要因があるため、実際に妊娠が起こつた確率は、計算された実際の妊娠可能率より常に低くなるのです(普通の繁殖能力のあるカップルが妊娠可能期に關係を持ったと想定したとしても)。また、これらの数字は早期の流産を考慮に入れてはいないのです。

このような事実を踏まえると、様々なメディアがこのような広告を用いて、コンドームが禁欲と同じぐらい効果があると

いう印象を人々に与えるのはまったく無責任であるとしか言いがありません。むしろ、これらメディアは、AIDSキャリアと性交渉を持つ人は三年以内にウイルスに感染することが当然予測される、という内容の公共広告を報じるべきなのです。

障害児の中絶は絶対良くないと学生は考えている

カップル・ツー・カップル連盟(The Couple to Couple League)と家族基金(Foundation for the Family)は、共にこつこつという広告は社会での不法な性交渉を認可することになるといふ立場から、コンドームの宣伝に反対しています。これらの広告に示されている、病気の予防が必要な性交渉とは、明らかに婚外交渉を想像させるものなのです。それ故、このような宣伝によって何が実際に広まっているかと言え、それは不法な性交渉に対する社会の容認なのです。

赤ちゃんに障害がありそうだからと中絶するのは良くないと、若者の大半が思っているとの調査結果が明らかになった。

不法な性交渉は、人格の発達への妨げとなり、正常な家庭生活に必要な美德に害を及ぼします。さらに付け加えると、不法な性交渉を持つ人が増える、性的感染病の感染者がそれだけ増えるということなのです。

15歳から24歳までの学生三百人に質問したところ、75%が「障害だけが理由で中絶するのは問題だ」と答えた。特に、ダウン症だからと中絶するのは、「もつてのほか」だと答えている。若年層ほど、強く反対する傾向にある。

若者達は、障害の有無で中絶するという考えを障害者への侮辱とみなし、「そういう子どもはいらぬ」と子どもを種類分けする女性の存在を望んでいない。

ヤングアダルト層(20~30代)に昨年行つた調査でも、障害を理由とする中絶に否定的見方が強まっている。昨今の時代の流れは急激で、障害に対する社会の姿勢もずいぶん変わってきている。若者の間では理想主義が目立ち、違いを持って生まれた「特別な子ども」は、社会において「特別な役割」を果たすと思われている。彼らは本能的に母子を守るつととし…(中略)生命を軽んじる、都合のいい中絶を拒絶している。

殺すためのクローン？

動物のクローン実験によって、健康がひどく損なわれる危険度が大きなことが分かり、人間クローンについても新しい道徳的・倫理的な疑問を持ちかけるようになった。オレゴン州地域霊長類研究所の研究者達は、クローン動物又はそれを宿している母親の多くは、妊娠中あるいは誕生後数週間で死んでしまうことを確認をもつて発見した。その理由の一つとして、本来子どもの父親と母親の両方から供給されるべき必要なDNAが欠如していることが挙げられている。

オレゴン州地域霊長類研究所のクローン研究室長ジェラルド・シャッテンは、「非常に多くの胎児や生後一ヶ月以内の新生児の死がともなっている」と最近認めている。人間クローン実験を道徳的・倫理的見地から見ると、この新しい研究がどのように影響するか、と質問されて、アメリカ生命倫理学顧問委員会の会長ジョゼフ・ハワード神父はこう答えた。

「その裏で数え切れないクローンの死を見ることなく動物のクローンが成功できるかどうかを調べる段階において、何が危険にさらされているかを、オレゴンの研究者達は確実に指摘している。」

ハワード神父は、これが人間のクローン造りを実現化させようとする人への歯止めになるだろう、と言う。「まず一番大切なのは」と彼は言う。「人間は、人ではなく自然の意図によってこの世に送られて来ることを望む権利があり、そうあるべきだということ。次に、人間の胎児は一人一人人間なのであって、使い捨ての実験用のねずみや猿ではないということである。」クローンの死の原因には、胎盤異常、異常なむくみ、通常の3、4倍多いへその緒の問題、そして重度の免疫的欠如がある。シャッテン氏はこう言ったという。「人間にも同じことが起きるかどうかわかる為に、クローン動物が何故しよっちゅう奇怪な異常で死ぬのかを詳しく知る

必要はない。それら動物に起こることは、人間にも当てはまるのだから。」
「人間は実験材料ではない」とハワード神父は言う。「人間は動物ではない。暴力をむさぼるバイオテクノロジー産業の為に今現在死んでいく哺乳類の胎児と同じ運命をたどることは、あってはならない。」

一九九九年アメリカ生命倫理学顧問委員会

死刑と中絶

先日私は、「中絶賛成」のデビーと話をしていた。途中で彼女は、「あなたは死刑にも反対なの？」と私に聞いた。普通、このように話題を変えようとする戦術に対しては、なごやかに元の話題に戻そうとすべきなのかもしれない。でも私はこの時、別の方法を探ったのだ。

「ああ、もちろん。私は死刑には断固反対だし、私達中絶反対グループはみんな反対だよ。そして死刑反対の説教もよくするよ。」と私は言った。デビーは、「そうなの」と言った。私が「そう、死刑はいくつかの理由で不正なのだ。その理由の一つは、人に死を与える事で問題を解決出来る、という考えを持ってしまふからね。」と

続けると、デビーは「それはそうね」とうなずいた。

「ある人が問題を起こしたからといって、その人を邪魔だと消してしまうより、もっと良い解決法を見つけなければならぬ。人間が起こした問題は人間らしく解決するべきで、殺してしまうのはそれに当てはまらないよ。」と私は続けた。

この会話をしながらデビーは気が付かなかったようだが、実は私は中絶にもピツタリ当てはまる論証を提示していた。実際中絶と死刑には重大なつながりがあり、世界中で中絶反対運動をしてきた私には、中絶に反対する人は死刑にも反対すると分かっている。

もちろんこの二つは同じ問題ではない。犯罪者と無垢な赤ちゃんには大きな違いがある。しかし同時に、それぞれのいのちの尊厳にまで差があるという程には、その違いは大きくないのではないだろうか。ヨハネ・パウロ二世が「いのちの福音」の中で言明されたように、「殺人者であっても、人としての尊厳を失うことはない」のである。

中絶と死刑を廃止しようと出来る限りの力を尽くす中で、統計の数字を比べてみるというのも当然の見方であろう。アメリカにおける死刑の公式な統計の記録は、司法省による一九三〇年からのものしか残っていない。それを見る

と、一九三〇年から今年の二月までに執行された死刑は四千三百八十一件である。一九六八年から一九七六年には一件も執行されていない。

アラバマ州ヘッドランドにある死刑研究プロジェクトのディレクターをしているワット・イプシーという歴史家は、アメリカの死刑の歴史を明らかにしている。一九九四年に発表された研究で、今のアメリカがアメリカとなる前の一六〇〇年代初頭から数えて、一万八千六百四十五件の死刑が執行されてきた、と彼は推定している。一九九五年から現在までに執行された二百六十五件をそれと足すと、一万八千九百十件という数字になる。

中絶に話を戻すが、アラン・ガットマツハー研究所（中絶を支持する研究所）のサイトに載っている報告によると、一九九六年の一年間で行われた中絶手術の数は、アメリカだけで百三十七万五千十三件、23秒に一件という事になる。別の言い方をすれば、私達の今までの歴史における死刑での死者の数の合計は、五年間における中絶での死者の数より少ないのである。

中絶であれ死刑であれ、たつた一人の死でさえ多過ぎるのだと確信し、私達といっしょに活動していきましよう。 フランク・ベイホーン

アピール

十主の平安

今日本ではいのちを損なう悲しい事件が多発しています。この根源にあるものは自分自身の都合上なにか理由があれば妊娠中絶もやむおえないとする考えがもとであることは間違いないと思われまます。実際に起きた事件の家庭がそうだと語っているわけではありませんが、多感な中高校生のころは偉そうなことを言っている親や教師が自分の都合が悪くなると中絶の名のもと自分の子どもまで殺して平気な顔をしていることに感ずく時期でもあるのです。

いかなる理由があってもどんなに小さくても人のいのちは守らなくてはならないことをまず親に伝え実践させなければ根本的解決にはならないのです。中絶経験者があまりにも多くその人達の反感を恐れうすうす気ずいているにもかかわらず全てのマスコミも評論家もこのことに触れようとしません、教皇様は「生命のはじまりに関する教書」の中で「人間の生命は、その存在の最初の瞬間から、すなわち接合子が形成された瞬間から、肉体と精神とからなる全体的性を備えた一人の人間として、倫理的に無条件の尊重を要求する」と教えておられます。

キリストはどんなに小さくても一人一人のいのちを愛し救うためにこの世に來られ十字架に架かられたの

です。私達が今あるのは受精卵の段階から守られてきたからこそなのです。受精卵に靈魂は宿っていないなど誰が証明できるでしょうか。受精卵や胎児のいのちを殺す者はキリストの愛をつまり神の愛を否定する者となるのです。

教皇様の教えは決して堅すぎるものでも古いものでもありません。回勅「いのちの福音」の中で中絶を経験した女性は主と今はそこで生きる自分の子どもにゆるしを求めることによって、全ての人がいのちの権利を持つことのもっとも雄弁な擁護者となりうるのです、と愛をもつて語っておられます。その女性の永遠の眞の幸せを願うての教えなのです。一見物分かりのよさそうな中絶の黙認は決して本当の愛の行為では無いのです。私達は受精卵や胎児のいのちの尊厳についてももっとと強く訴える使命があるのではないでしようか。

「幼いいのちを助けて下さい。」のアピール文を各地でご利用いただければ幸いです。

幼いいのちを助けて下さい。

現在、低用量ピルが解禁されても売上が予想通り伸びないため、製薬メーカーと産婦人科医達は報道関係者と一体となりピル推進の第2次キャンペーンを開始しております。今だにほとんどの国民が低用量ピルの真相を知らされてい

ないため、このキャンペーンによる影響が大変懸念されます。

さらに今、大量に幼いいのちを奪う非常に危険な動きが水面下で行なわれていることにお気づきでしょうか？先日一部の新聞で報道されましたが、日本母性保護産婦人科医会(日母)が母体保護法(旧優性保護法)を改定し、妊娠12週未満の中絶に女性の自己決定権を認める(12週未満の中絶の自由化)ことと不妊治療に伴って多胎妊娠となった場合に一部の胎児を抹殺する減数手術を認めるように法制化することを国会に働きかけることが決定しました。この12週未満の中絶が女性の意思のみで自由に行なえるようにすることには二つの目的が隠されているのです。

一つは低用量ピルの作用にはピルを服用していても完全に排卵を抑制するのではなく、卵が受精した場合にはピルによる子宮内膜変質作用で着床出来ないための早期化学的中絶作用もあること、また、さらにその作用を利用して低用量ピルを事後に数倍量服用するモーニングアフターピルの方法もありますが、それが現行の墮胎罪に抵触する恐れがあるためそれを回避するためです。

もう一つの目的は、今回ピル解禁を推進した勢力が狙っている次の計画を達成するための地ならしなのです。それは妊娠数週間以内なら女性が病院ではなく家で自分

だけで中絶できる膣座薬のプロスタグランジン製剤と内服によるRU486の製剤の解禁を目論んでいるのです。

今回の母体保護法の改定はこれを通すための外堀を埋める作業なのです。自分自身は受精卵の時点から素晴らしいいのちの恵みを受けていながら、自分にとつて都合のよい理由をつけて後に続くいのちをどこまで奪ったら気がすむというのでしようか。いのちの軽視の容認は際限なくエスカレートしていくのが特徴なのです、また日頃正論を唱え愛を説く多くの人達が叫び声もあげられない弱い立場のいのちの側に立つのではなく、そのいのちの発生に責任のある強い立場の側に立ち、いわゆる社会派の人達に嫌われるのを恐れ自己保身のため、幼いいのちを救う活動を無視し一切協力しないばかりかピル反対のアピールさえ妨害しようとしているのが現実です。

しかしそれだけに幼いいのちを守るためには、どんなに小さな活動でも今ますます貴重であり重要なのではないでしようか。どうかこの見地から今後次の2点につきましてお力添えいただけないでしようか。

1. 低用量ピルの服用で実際には多数の死者が出ていることと環境ホルモン作用で次世代の子どもの健康といのちに深刻な影響が現れることが懸念されていること、またピルの作用は排卵抑制だけで

はなく、倫理的問題として重大な受精卵の着床阻害作用もあることを情報として多くの人達に広く告知するよう関係者に働きかけること、また独自にも伝えること。

2. 中・高校生でも一人で家で中絶出来るプロスタグランジン製剤とRU486の製剤の認可を断固阻止し、その準備段階ともいふべき今回の母体保護法改定に反対すること。

日頃諸活動におかれまして大変お忙しい身であられることは十分分かっておりますが、死の文化の阻止のためどうかよろしくお願い申し上げます。

また低用量ピルの本当のことを知るための参考図書としましては産婦人科医の武田玲子先生と環境ホルモン問題でご活躍中の吉田由布子氏の共著で最新の諸外国のデータにもとずく大変分かりやすい素晴らしい本が一般書店で発売されています、お取り寄せになつてもぜひお読みいただくことを心からお勧めいたします。

『ピルの危険な話』

著者 武田玲子 吉田由布子
出版社 東京書籍
電話 03-5390-7531
代金 17000円

平田国夫
〒466-0827
名古屋市中昭和区川名山町40-1
TEL 052-834-3439
FAX 052-833-2155

若いアメリカ人に純潔が流行

「初めての性体験の追及が今でも若いアメリカ人の中で決定的なテーマであるにもかかわらず、節制が「決定的な特徴」となりつつある、とコラムニストのキャスリーン・ケラーはロサンゼルス・タイムズに投稿している。

何人かの専門家は、一九九〇年から一九九六年にかけて15歳から19歳のうちに妊娠した十代の数が17%減少した原因の一部に、この節制が関係あるとみている。「私たちは、妊娠件数が減少したうちの4分の1は、女性が徐々に性行為に関心がなくなってきたことにあると考えています。」とアラン・ゲートマツハー協会のジャクリン・ダロックは語った。

有名人の純潔を特集したUSマガジンの先月号を取り上げ、ケラー氏は純潔が、場合によっては取り戻すことができる「もの」として、いかにトレンドとなっているかを説明した。アズサ・パシフィック大学では、学生たちが「純潔の誓い」をし、もし「間違いを起したら」その学生は節制に対する誓いを再びし、生まれ変わった「純潔に戻る」のである。中には宗教活動に基づくプログラムもあるのですが、宗教や道徳問題にとらわれないものもあるのです。

このプロジェクトのコーディネーターであるキム・ワッツ氏は、「私たちはコンドームによる失敗の率について語り、セックスの健康上の危険について教えます。そしてそこには感情が傷つくことも伴うことを教えているのです。」

ロサンゼルス・タイムズ 3月20日付け

アンドリュウ神父の戦い

アンドリュウ神父は裁判も行われないうちに、数カ月の拘留を強いられた。しかも死にゆく子どもを救おうとしたからという、不可解極まりない理由によるものでした。彼は、35年にわたる聖職者生活の大半を、ペルーでの布教にあてた後、60年に米国に戻り、一年間プロライフ活動について学んだ。その中で、ジョン・アンドリュウ女史が

ニューヨークで中絶廃絶運動に本腰をいれて取り組んでいる事を知り、「自分の進むべき道はこれだ」と確信したという。

彼は週一回の集いに参加してミサと黙想を重ね、ついに堅信を授かって救済活動を始めた。だが、同年9月28日に逮捕、ウエストチェスター郡の刑務所に護送されてしまう。他の逮捕された仲間と同様、彼も本名を明かさずとせず、獄中ではアンドリュウ神父と名乗っていた。ローマ教会最高顧問のオコナー氏がじきじき面会に来た事で、彼は一躍有名になった。彼はまた子ども達を死の脅威から救おうという行為を罪とみなし、権力で人を拘留する州警察のやりかたを批判し続けた。何よりも、プロライフ運動を偽善と決めつける姿勢が許せなかつたという。

法に背く事について良心の呵責はないかと尋ねたところ、「法律自体が間違っている場合は違反とは呼ばない。聖アウグスチヌスの言葉にも『悪法は法ならず』とあります」と断言した。「世のカトリック信者が、皆救済意欲に燃えているとは言わ

ないが考え方の基本として、中絶に反対という点では一致するはずだ。」

また、彼は次のように述べています。「聖職者の中にも、中絶を殺人と思わない者もいれば、一般人と同様、ためらいながらも肯定する者さえいる。けれど、毎週のミサにおいて中絶について確固たる態度を示すのが、本来あるべき姿なのではないでしょうか。中絶について一言も触れない事によって、中絶は大した問題ではないと伝えていく事になるのです。」

ロバート・ヒンマン著

思い

私達はすべての患者と看病する人の事をもっと考えなければならぬ。道徳的にも実際的にも、彼等の苦しみを和らげ、彼等の尊厳を尊重できる道を探すべきである。心からの慈悲心を持って、ならば、かたわらに居て出来る限りの気配りをし、希望を持ち直させ、生きている意味を見い出させ、愛され尊重されていると感じられるようにする事である。

[511] 赤ちゃん：最初の十ヶ月の旅

[515] 経口避妊薬：ピル

注文：	1 - - - - - 5	1部 = ￥100
	6 - - - - - 20	1部 = ￥75
フルカラー	21 - - - 999	1部 = ￥50
	1000 - - 以上	1部 = ￥35

性教育の材料として、学校、教会、家族、産婦人科

【プロ・ライフニュース】

[101] 1部ご注文.....無料..... + 郵送料

【カラー・パンフレット】

- [201] 生か死..... + 郵送料
- [202] 第二の処女生..... + 郵送料
- [203] デート..... + 郵送料
- [204] どうするの?..... + 郵送料
- [205] "NO"という技術..... + 郵送料
- [206] テイーンの出産コントロール..... + 郵送料
- [207] パージンの瀬戸際..... + 郵送料
- [208] していましたか..... + 郵送料
- [209] 親権限と「10代の性」..... + 郵送料
- [210] 貞節のすすめ..... + 郵送料
- [211] 中絶行為は女性を解放しない!..... + 郵送料

【ポケット・サイズ】

- [301] 若い生命「1セット=カード+人形」.....30円 + 郵送料
- [303] 国際プロ・ライフ・シンボル・ピン.....200円 + 郵送料
- [304] 国際プロ・ライフ・ネックレス.....500円 + 郵送料
- [305] 胎児の人権宣言カード.....30枚=100円 + 郵送料
- [306] ミニソフィアAceエース(税別).....7980円 + 郵送料

【ビデオ+ 本・日本語】

- [401] 沈黙の叫び...(VHS/Beta).....7000 + 郵送料
- [403] ビリングス・メソッド...(VHS/Beta).....7000 + 郵送料
- [404] いのちーおくりもの...(VHS).....13000 + 郵送料
- [407] 命美しいもの = one&only.....(VHS).....20000 + 郵送料
- [409] 聞こえる?天使の鼓動.....(VHS).....6000 + 郵送料
- [410] ビル先進国・英国からの警告...(VHS)...15000 + 郵送料
- [500] (本) 生命問題に関する...(カトリックの教え)...2987 + 郵送料
- [501] (本) 自然な家族計画...(ビリングス・メソッド)...1000 + 郵送料
- [503] (本) プロ・ライフの旅.....300 + 郵送料
- [504] (本) 小さな鼓動のメッセージ.....1200 + 郵送料
- [505] (本) いのちをみつめて.....500 + 郵送料
- [506] (本) 命あるすべてのものに(マザー・テレサ).....650 + 郵送料
- [507] (本) 私の生命を奪わないで.....2300 + 郵送料
- [508] (本) いのちの福音.....1500 + 郵送料
- [509] (本) 小さき生命のために.....1300 + 郵送料
- [511] (本) 赤ちゃん：最初の十ヶ月...12ページ...100 + 郵送料
- [512]本 日本プロ・ライフ・ムーブメントについて.....300 + 郵送料
- [513]本 カトリック教会と日本プロ・ライフ・ムーブメント.....500 + 郵送料
- [514]本 神様は中絶をどのように言っておられるでしょう.....300 + 郵送料
- [515] (本) 経口避妊薬：ピル.....100 + 郵送料
- [516] (本) いのちの福音と教育.....1470 + 郵送料

パンフレット申し込は・・・

1 ~ ~ 5	1部 = 35円
6 ~ ~ 100	1部 = 25円
101 ~ ~ 500	1部 = 20円
500 ~ ~ 以上	1部 = 15円

組み合わせは自由です

十代の性

(6)

質問。

つきあつて6ヶ月になります。充分に貯金ができたから結婚しようと思は言つてくれました。彼は言つてくれます。愛し合つてるのだからセックスするのは自然なことだともいいますが、どう思いますか？

答え。

結婚しようと思つて口で言うのは簡単です。それだけに、後で気が変わつてやっぱり結婚はやめようとも言いかねません。愛とは他人のため、自分に献身することです。セックスは(夫婦にとつての)愛情表現のひとつですが、愛のないセックス(例：売春)もあればセックスぬきの愛(例：結婚相手が障害者の場合)も存在します。

誰のためを思つてセックスしようと思は言つていられるのでしょうか？ 彼のため、それともあなたのためでしょうか？ セックスしようと思つると自制すると言つてはどちらが彼にとつて難しく、どちらかより望ましいでしょうか？ あなた自身にも聞いてみて下さい。「どうすれば彼に自分の愛を伝えられるだろう。彼がもっと人間として成長するのに自分は何をしてあげられるだろう。彼の望むものを与えたところで、彼の利己心を増長するだけではないだろうか」と。

質問。

結婚は紙切れ一枚の形式的な社会契約にすぎません。今セックスしても結婚後にしても、愛し合つていれば一緒ではないですか？

答え。

歴史上どの文明や宗教にも、常に何らかの結婚の儀式が存在します。なぜでしょうか？ その儀式において、当人同士・家族・友人・その他大勢の前で、ふたりが夫婦になると誓つたのです。それまであなたは(そしてあなたの彼女も)法の許可なしに決意を変えることができず。結婚後は、社会的な結びつきが生まれます。ふたりは法的に結ばれ、あなたも奥さんも子どもも法の下に保護されるのです。

本当に彼女を愛しているなら、結婚という形で公的に愛を表現するのをどうして迷うのですか？ 責任ぬきで結婚の特権だけを味わおうとするのですか？ 結婚という形で結ばれるにはまだ早いと思つたら、同様に、セックスで結びつくにもまだ早いのです。

『暗闇の中へ』

(中絶後の悪夢)

40歳を過ぎ、もう子どもを育てる準備もなく、出産を恐れている状態では、中絶は簡単な逃げ道のように思われます。しかしそれは中絶が終わるまでの間です。

中絶に関する論争はここ数年間激しくなってきましたが、私は一九八四年のある朝までほとんど注意を払っていませんでした。その時生理が10日間遅れていました。これは異常なことでしたが、41歳にもなって自分が妊娠するとは思っていませんでした。病院に検査を受けに行くと、妊娠していると判りました。夫は知らせを冷静に受けとめ、ただこう言いました。「医者はずどもを墮ろしてくるのかい？」。私はどの宗教にも入っていませんでしたし、女性に「選択の自由」を与える法律を好ましく思っていました。それでも夫の言葉にはとてつもないショックを受けました。17年前に出産した時と同じことを、また新たに始めるという選択はしたくないものでしたが、私の中にある小さな生命を「終わらせろ」ということは正しいとは思われませんでした。

させられなかったことを詫言しました。私のケースは病院の委員会で話し合われ、その年とつた医者は産科から外され、婦人科での診療を制限するよう勧告されました。

私が次の出産を試みるだけの勇気を奮い起こすのに数年かかりました。私は息子を一人つ子にはしたくありませんでした。別の医者ならもっと楽な出産をさせてくれるだろうと願っていました。二度目の分娩は前回よりも楽で、娘と息子を両方持てた喜びに、もう二度と子どもを生まなくてもよいという素晴らしい安心感が加わりました。

41歳という年で出産のことを考えると、全くの恐怖に見舞われました。私の心は動揺し、昼も夜も医者に言われた選択を考えました。早急な「処置」が彼の勧める方法でした。私は彼に、その提案に彼が何か道徳的観念を持つているのかどうか訊ねました。すると彼は笑って、私くらいの年齢の女性は子どもを生むべきではないと言いました。

もう一つの選択はもちろん妊娠を受け入れることでした。この事を考えると、17年前の息子の誕生の時の様子が鮮やかに甦ってきます。28時間に及ぶ分娩、部屋にたった一人で寝かされた看護婦が時々立ち寄りだけ、その後何年もの間悪夢の元となる出産でした。その時の医者は定年間近で、出産が終わった後、朝部屋に来て、もっと楽に

私は医務室にいる看護婦とだけ話をしました。彼女は「今だと何事もなく終わります。」と言いました。私は彼女の言うことをあまり信じていませんでしたが、私の中の何が気持ちが変わる前に急がなければと私に語って

(7ページから)

きました。それで私は同意書にサインし、次の日、入院しました。

家に戻ってきて二、三日もしないうちに、私は泣き、叫び、私がしてきたことに対して反応するようになりました。私はいつもの自分が自然の摂理に反さなければ、生命を得ていたであろう子どもを考えた。

私は誰かに話したかったのですが、誰と向かい合えばよいのか分かりませんでした。家族で夕食をとる時は習慣として食事をし、それ以外の時間には何も口にしませんでした。何ヶ月の間、独りになるといつも泣いていました。何度も何度も思い返しては、どうしたら私たちは合理的に、もう一人の子どもを持つ理由について話し合えただろうかと考えました。私たちの家に子どもももう一人分の部屋を用意できたでしょうか。私が恐れていた陣痛と出産の苦痛は、代わりに私が今苦しまなければならぬ、感情的苦痛と同じくらい苦しいものだったのでしょうか。

翌年、私は週に一度カウンセリングを受けるようになりました。カウンセラーの女性は、私が罪悪感、怒り、痛み、そして喪失感から抜け出す手助けをしてくれました。その時以来、私は積極的にWEB Aの活動に参加するようになりました。これは中絶により搾取される女性のための団体です。「搾取される」という表現はきつすぎるのではと言う人もいます。私はそういう人々に向かってこう言います。「ええ、そうです。でも間違っていないです。」と。中絶

を簡単に行えるような社会では、法律に認められていることと、正しいことが同じものとして見なされています。

私はここ数年の間に、私のように中絶することを決心した多くの女性たちと出会いました。なぜなら、望まない妊娠に困り果てている時に、中絶が問題を解決する簡単な方法として勧められるからです。そうした女性たちは彼女たちの決断が、中絶の後に彼女たちに及ぼす破滅的心理的影響については、助言、相談を受けていないのです。

社会は女性を守る手だてを供給しなくてはなりません。望まない予期せぬ妊娠は、身体的にも、精神的にもシロツクです。カウンセリングは必ず行われなければならないし、生まれていない生命についての情報を含んだものであるべきです。妊娠を知った時点で、胎児がすでに脈打つ心臓と、測定可能な脳波を持っていることを知る女性がどれだけのいるでしょうか。

私の心の中には、私の失った子どものために特別な場所がこれからも常にとつてあることでしょう。最初から、私はあの赤ちゃんは女の子だと直感していましたので、彼女に「バーバラ」という名を付けました。私は一日も欠かすことなく彼女のことを思い、私の腕は彼女を抱き、世話をしたいという思いで痛みます。

もし私と話をすることで、他の女性が中絶を思い留まる助けとなるのであれば、私の小さなあの子の短い生命も無駄ではなかったこととなります。